

「ゼロ・トレランス」(非寛容)とは、社会にとつて「目ざわりな貧困」を警察が監視し、厳罰を加えることを正当化する考え方。米国を発信源とし、新自由主義とともに世界に拡散した理論の問題点をあぶり出す。

一九九四年、ニューヨーク市長に就任したジュリアーニ氏は

「麻薬と犯罪の温床となったニューヨークを徹底的に清掃する」との公約の下、警察機能を強化し、軽犯罪を厳

獄・ヴァン・セン
監・ク・池
という著、菊
貧困とイン
力子

しく取り締まった。そうして犯罪多発都市は「最も安全な都市」へと生まれ変わった」と盛んに宣伝された。「成功」神話に追従したのは英国、フランス、ドイツなど。各地で推進されたゼロ・トレランス政策は、生活保護など社会福祉の縮小、雇用の不安定化を伴い、貧困層を

増大させる結果に。

このまま人々を警察と刑罰で管理し、投獄し続けるのか、国家の社会的機能の再生に取り

貧困という監獄

クローネンベルグと刑罰国家の到来



り組むのか、岐路に立たされていると著者は警鐘を鳴らしている。(新曜社・